名探偵・金田一耕助論
――由利先生との比較――

木村由花

はじめに

本稿は横溝正史（一九一〇年～八一年）のいわゆる名探偵金田一耕助とそのシリーズ作品の魅力とは一体何なのか、また金田一物がどのようにして成立しているのかを、後に金田一物へと翻案された由利先生物である『夜光怪人』（一九四九年五月～五〇年五月）を対象として考察することを目的とする。さらに横溝探偵小説の系譜において、由利先生シリーズが金田一シリーズ成立の前段階作品であると推定し、由利先生物の中のある作品が主人公を金田一と変更すればそのまま金田一物として成立する可能性を探ってみたい。

一　由利先生版『夜光怪人』と金田一版『夜光怪人』

由利先生という探偵の登場時期は金田一耕助よりも早く、初登場作の『石膏美人』は昭和十一（一九三六）年五月（講談社『講談倶楽部』）に発表された。つまり戦前からの横溝ファンにとっては、横溝現代ミステリーの探偵役といえば由利先生であり、金田一の方こそ第二の名探偵なのである。由利先生は本名由利麟太郎と言い、明治二十六（一九〇一）年生まれの白髪紳士で、元警視庁の名捜査課長という経歴を持つ人物とされる。それが突然政治的圧力によって失脚し、以来三年間行方不明になっていた。『石膏美人』は行方不明後、三年ぶりに姿を現した由利先生が最初に解決した事件を扱う(注1)。

由利先生物の『夜光怪人』は昭和二十四（一九四九）年五月から翌年五月まで（間に二ヶ月の空白があるが）雑誌『少年少女譚海』に連載された。それを昭和五十一（一九七六）年に山村正夫が改稿し、金田一耕助を探偵役とする『夜光怪人』として生まれ変わらせて発表した(注2)。「由利先生」が「金田一探偵」に変わったことで作品にどのような変化や不都合・不自然が生じたのか。この検討を通して金田一耕助という人物の特性を浮き彫りにしてみよう。

由利先生物は現在容易に入手できない状態のため、由利先生版『夜光怪人』のあらすじを記しておく。

『夜光怪人』は御子柴進少年が主人公となる児童向けの長期連載ミステリーである。世間を騒がせている「夜光怪人」に御子柴少年が遭遇し、そこで夜光怪人が「人魚の涙」という真珠を盗むつもりだと判明したことから物語は始まる。御子柴少年は新聞記者・三津木俊助と私立探偵・黒木と共に真珠の警護に当たるが、まんまと真珠は盗まれ、三人は最初の敗北を味わう。そして次の戦場である華族・古宮家主催の仮面舞踏会でもまた夜光怪人に出し抜かれ、古宮家の珠子嬢を誘拐されてしまう。ここで夜光怪人に殺された一柳博士という人物の娘である藤子が戦いに加わる。藤子は、一柳博士が発見した海賊の宝物を狙う夜光怪人に父を殺され、弟を人質にとられていたのである。藤子は復讐を誓って一人で夜光怪人を追ってしまった。そこで登場するのが名探偵・由利麟太郎先生である。由利先生は話を聞いただけで夜光怪人の正体は黒木探偵であると推理し、夜光怪人の隠れ家を突き止め、黒木探偵を追い詰めたが、実は替え玉だった彼を真犯人に殺され、取り逃がしてしまう。

そして決戦は獄門島の隣島、龍神島で行われる。夜光怪人を追って龍神島に入った由利先生一行は地元の海賊の首領と撃ち合って共倒れした夜光怪人を発見したが、その正体は被害者と思われていた「人魚の涙」の持主、小田切準造だった。そして宝物は亡くなった一柳博士の遺志を継いで貧しい人々の役に立てると、藤子が宣言して物語の幕は閉じる。

（由利先生版『夜光怪人』）

この話の探偵役を「由利先生」から「金田一耕助」に変えたのが山村による金田一版『夜光怪人』であり、両作品は話の筋や台詞などに関してはほとんど同じと言える。例えば次の通りである。

「御子柴進君というのはこの春、新制中学の三年生になつたばかりの少年です」（由利先生版『夜光怪人』）[注3] →「御子柴進はこの春、中学の三年生になったばかりの少年である」（金田一版『夜行怪人』）[注4]

「ブランコからジミー小島がもんどりうつて、地面に落ちてきたのです。見ればその胸にはグサット一本の短刀が。……」（由利先生版『夜光怪人』）→「ブランコからジミー小島がもんどりうって、地面に落ちてきたのだ。見ればその胸には一本の短刀が……。」（金田一版『夜行怪人』）

「おゝ、なんということでしよう。覆面の首領というのは、東京で殺されたとばかり思われていた小田切準造翁ではありませんか」（由利先生版『夜光怪人』）→「ああ、なんということだろう。ふくめんの首領というのは、東京で殺されたとばかり思っていた小田切準造老人ではないか」（金田一版『夜行怪人』）

しかしながら、由利先生版『夜光怪人』と山村正夫の金田一版『夜光怪人』は細かなところで差違が生じている。まず右の引用でも分かるように、全体の語りが由利先生版『夜光怪人』は「ですます調」で、金田一版『夜光怪人』の方は「である調」という違いがある。これは（横溝作品は「である調」の方が多いのだが）、由利先生物は児童向け

作品のため「ですます調」にしたものだろう。

さらに変更されている点は各章に付けられた小題である。由利先生版『夜光怪人』は雑誌の連載作なので小題は各回の見出しだったが、それをそのまま使わず細かく変更している。同一題は省略し、漢字から平仮名への変更、または旧漢字の変換など単純な文字変換以外の変化が見られる小題のみを一覧表として次に示す。

章	由利先生版『夜光怪人』（全44章）（昭和二十四～二十五年）	金田一版『夜光怪人』（全44章）（昭和五十三年）
1	**隅田川の怪**	**モーターボートの怪人**
3	**少女と怪獣**	**夜光るイヌ**
8	トランクの怪	トランクの物音
12	**とゞろく呼笛**	**追われる怪人**
17	クロロフォルム	麻酔薬
21	大曲芸	はなれわざ
22	哀れな人質	哀れ人質
23	嘆きの古宮氏	古宮家のなげき
28	由利先生登場	金田一耕助登場
31	飛來の短剣	飛んできた短剣
38	**蘭堂いずこ**	**変装の名人**
40	**床の血溜り**	**血ぞめの短刀**
42	龍神島の血戦	龍神島の撃ち合い
44	地底の大宝窟	地底の大宝庫

右のいくつかは子供には分かりにくい単語を言い換えたものである。例えば第十七章の「クロロフォルム」→「麻酔薬」は専門的な薬品名を子供は知らないだろうとの配慮と、本文中の「クロロフォルム」という単語が何を意味するのか子供に気付かせるために小題を変えたものと思われる。第二十一章の「大曲芸」→「はなれわざ」、第四十四章「地底の大宝窟」→「地底の大宝庫」も同じ意図による書き換えであろう。

そして表中の**太字表記**の小題に関してはモチーフそのものに変化が見られる。第一章は、冒頭に記述されるいくつかの夜光怪人目撃談のうち、隅田川での船頭の体験談を章の象徴としている点で両章は同じだが、由利先生版では出来事（「怪」）に注目しているのに対して、金田一版では「怪人」に注目している。この第一章から「夜光怪人」と

いう呼び名は登場するにもかかわらず、あえて「モーターボートの怪人」としている。なぜこのような変更をしたのだろうか。

由利先生版『夜光怪人』の第三十八章タイトル「蘭堂ゐずこ」は、この章の末尾が「大江蘭堂はいまいずこ。」であることに由来して付けられたものだろう。金田一版『夜光怪人』が由利先生版『夜光怪人』に忠実に従おうとするならば小題をそのまま使用してもよいはずである。しかしここで山村は、蘭堂が小題通りの「変装の名人」であると強調することで蘭堂がいかに手強い敵であるかを読者に念押しし、さらに第四十章の「血ぞめの短刀」で現場に残された血まみれの凶器を強調することで、そこで殺人が行われたと思わせ自分を被害者に仕立て上げて密かに身を隠した蘭堂の巧妙さに読者の注意を引き付けている。このことによって山村は「金田一が蘭堂に出し抜かれたのはやむを得ないことだった」と読者に訴えていると考えられる。

金田一の特徴の一つとして「頼りない」という性質がしばしば挙げられるが、これは探偵小説として起こるべき殺人が、金田一が「頼りない」ことによって行われているということを意味する。金田一の「頼りなさ」は事件をより面白くするための重要な要素であると同時に、金田一が事件関係者及び読者から「悲劇を防ぎ得たにもかかわらずそれを成し得なかった人物」として非難される危険性を持っている。つまり第三十八章、第四十章における山村の小題変更のねらいは、由利先生と金田一の探偵としての印象の落差を緩和することである。大悪党・大江蘭堂に出し抜かれた金田一探偵の失敗を露骨に表すことを避け、金田一に対する非難の声を抑えることで、読者に金田一版『夜光怪人』は金田一が一方的に振り回されるだけの作品であるという印象を与えず、狡賢い大悪党と名探偵との知恵比べという由利先生版『夜光怪人』の雰囲気を守ることであったと考えられる。

二　二つの『夜光怪人』から読み取れる金田一耕助像

さらに二つの『夜光怪人』における文章そのものを細かく比較してみよう。『夜光怪人』は、由利先生版と金田一版では固有名詞以外にほとんど変化が見られない。由利先生及び金田一登場の場面の例を挙げよう。

「由利先生はにつこり笑うと、「はつはつは、怪少年はよかつたね。おい、怪少年、こつちへ出てきたまえ」」（由利先生版『夜光怪人』）
→「金田一耕助はにっこり笑うと、「ハッハッハッ、怪少年はよかったね。おい、怪少年、こっちへでてきたまえ」」（金田一版『夜光怪人』）

「ふむ、そのことだがね。実は……あゝ、ちょうどいゝところへやつてきた。紹介しておこう」（由利先生版『夜光怪人』）→「フム、そのことだがね。実は……ああ、ちょうどいいところへやってきた。紹介しよう」（金田一版『夜光怪人』）

このように、仮名遣いの相違くらいしか変化が見られないことが多い。また、行動の描写については、次の通りである。

「由利先生は懐中電灯で足下をてらしながら、一歩〻〻、注意ぶかく、階段をおりていきます。」（由利先生版『夜光怪人』）→「金田一探偵は懐中電灯で足もとを照らしながら、一歩一歩、注意ぶかく、階段をおりていく」（金田一版『夜光怪人』）

「あなやとばかりに由利先生は、ピストルを手に取りなおしましたが、うつかり撃つことはできません。」（由利先生版『夜光怪人』）→「すわとばかりに金田一耕助は、ピストルを手にとりなおしたが、うっかり撃つことはできない。」（金田一版『夜光怪人』）

右のように全体としては単に固有名詞を入れ替えただけの改稿で済まされている。その中で金田一の言動に興味深い変化が見られる箇所がいくつかある。それは主に探偵役登場の場面に多い。その例を左に示す。

	由利先生版『夜光怪人』		金田一版『夜光怪人』
147	おはいり。三津木俊助君	116	は、はいりたまえ。三津木俊助くん
150	ふむ、わしも決心した	118	ああ、ぼくも決心した
156	そうだよ。ねえ、三津木君	122	そ、そうだよ。ねえ、三津木くん
156	由利先生はパイプに火をつけると、	122	金田一耕助はどもりながらいうと、

また、探偵の登場場面では大きな変化がもう一つ生じている。読者が初めて目にする由利先生及び金田一の外見的印象の描写である。由利先生版『夜光怪人』の第二十八章「由利先生登場」の冒頭では、

いかにも、それは由利先生でした。由利先生、五十にはまだ間のある年ごろですが、頭髪雪のごとく、白くやせぎすながら、鋭い眼光の持主。じつとにらめば、いかなる祕密も見とおさずにはおかぬという眼差しですが、につこり笑えば、幼児もなつこうという温顔でもありました。

とあるのに対して、金田一版では、

いかにもそれは金田一耕助だった。例によってよれよれの着物にはかますがたで、スズメの巣のようなもじゃもじゃの髪の毛を、手でかきまわしている。

となっている。これは小説のみならず、金田一版『夜光怪人』の刊行年の二年前（一九七六年）から始まった、市川崑監督による金田一耕助の映画シリーズ（注5）で主演男優にも演じられている金田一耕助の象徴的な姿である。

しかし、この場面でこれらの金田一の特徴を描写するのは少々不自然である。というのも、金田一の頭をかき回すという癖は、彼が極度の興奮状態に陥った時に発動するものであるはずだが、金田一がさして興奮するとも思えないこの場面でその癖がはっきりと現れている。この不自然なタイミングであえて金田一のこのような姿を読者に見せた理由は、金田一耕助の象徴的な姿を登場場面で強調することで、山

村は読者に「ここに登場したのは金田一耕助である」ということをより強く印象付けたかったからであろう。

また、由利先生物を金田一物に改稿した際に手直しされなかった部分でも不自然な点がある。いよいよ夜光怪人の隠れ家と思われる怪しげな穴に潜入する場面で、金田一版『夜光怪人』では金田一が三津木や御子柴少年に「きみたち、かくごはいいだろうね」「うん、いい度胸だ。それじゃわたしについてきたまえ」と確認を取ったうえで率先して足を踏み入れているのだ。この行動力は、「頼りなく」運動音痴の金田一にしては少々不自然である。このようなきびきびとした行動は由利先生の得意とするところであって、金田一は未知の領域に率先して踏み込むような人間ではない。後に続く二人の勇気を確かめて「いい度胸だ」と評しているところなどはさらに金田一らしくない。金田一から踏み込むとしてもこの場合なら飄々として「ひ、一つ中に入ってみましょうか」くらいのことを言いそうだが、この発言ではよく「頼りない名探偵」と評される金田一が、正に由利先生のように用心深く頼りがいのある人物に見えてしまう。

しかし、これらの不自然さはあるものの、金田一版『夜光怪人』は金田一の象徴的な言動を印象的に織り込むことで金田一物として成立している。多少の不自然さを覆い隠すほど、金田一のこの描写は強烈に「金田一耕助」を主張している。このことは金田一の右の描写を挿入することで他の由利先生シリーズの作品でも『夜光怪人』のように金田一物への翻案が実現し得るということを意味する。

ではなぜ『夜光怪人』が数ある由利先生シリーズの作品群の中から選ばれたのだろうか。

由利先生の事件との関わり方の特徴として、多くが能動的な関わりであるということが言える。新聞に掲載された事件の記事を読み、あるいは前職の伝で事件の概要を聞き、あるいは由利先生の助手的役割を担う三津木俊助から相談を受けて、自分が興味を持った事件にのみ途中参加して謎解きをしていくというのが由利先生の一つのやり方である。よって事件との関わりは物語の後半からということが多く、由利先生が金田一のように初期から友人知人に依頼されて事件に関わっていたにもかかわらず、犯罪を未然に防ぐことができなかったという例はほとんどない。

しかし、『夜光怪人』での由利先生は御子柴少年に拝み倒されてしぶしぶ出馬したとされており、さらに由利先生の登場直後、目と鼻の先でジミー小島が夜光怪人によって殺害されている。その上、由利先生の最初の推理は外れ、まんまと夜光怪人に出し抜かれた形となり、結局は夜光怪人に始終振り回される形となっている。さらに脇役ではあるが金田一物でよく描かれる「薄汚い老婆」が死体となって発見され、場面の不気味さを煽るという演出もされている。この事件への受動的参加と「頼りにならない」様子、「老婆」の登場という演出法が金田一物の特徴と一致しているのである。由利先生物の中でも『夜光怪人』はこれらの一致によって、金田一物への翻案が容易な作品だったと考えられる。

三　金田一耕助誕生について

横溝正史が金田一耕助というキャラクターを生み出す際に、現代ミステリーの先輩探偵として彼はまず由利先生を意識したはずである。両者は現代という時代設定、トリックの重厚さにおいて共通している。また、作品の一部では由利先生物の『真珠郎』（博文館『新青年』一九三六年十月～三七年二月）のような独特の耽美的な世界観、探偵役自身の「趣味的」な探偵であるという性格もよく似ている。しかし、こうした作品全体の雰囲気を引き継ぎながら由利先生には無い要素を金田一耕助という人物は多く持っている。

まず大きく違うのは、これまでに見てきたようにその性格である。落ち着きがあって真面目な紳士である由利先生と、どこかふらふらとしていて頼りない、くたびれたイメージの金田一では正反対だ。また、由利先生は探偵小説の探偵役としては、事件への読者の集中を邪魔しないという点でもその警察関係者からの信頼度も推理力も申し分ない人物である。奇抜なトリックの難解な事件を由利先生が真面目に解いていくのが由利先生シリーズである。しかし横溝正史は意図して金田一をこの由利先生とは正反対の性格に作り上げた。つまり、金田一耕助とは当初は作家・横溝正史の遊び心が作った試験的なキャラクターであったと考えられる。

由利先生物と金田一物を比べた時、探偵役の登場に至るまでのストーリー展開に注目すると、金田一物初作の『本陣殺人事件』（光文社『宝石』一九四六年四月～十二月）は明らかに由利先生の「形式」をそのまま継承している。由利先生物では、事件の前半は主に助手役である三津木か、もしくはその他事件関係者達によって展開される。肝心の由利先生は物語の後半以降に登場し、登場してから間もなく由利先生による謎解きに入るというもので、由利先生はあくまで事件解決部分のみの主役である。その登場の仕方も相談を受けて三津木に同行するという形で事件の渦中に乗り込む場合と、新聞等により事件に興味を持ち、能動的に事件に関わるという場合の、二つのパターンに大別される。『本陣殺人事件』では前者の受動的なパターンをそのまま採用している。

金田一シリーズ第二作目である『獄門島』（『宝石』一九四七年一月～四八年十月）は殺人に使われたトリックや俳句を使った「見立て殺人」という斬新な発想という点において名作としての高い評価を受けており、また『本陣殺人事件』に比べて金田一の登場場面が格段に増えている。しかしその一方で、金田一の探偵としての頼りなさが最も顕著に表れた作品でもあった。金田一は事前に何らかの事件が起こる可能性を鬼頭千万太の遺言によって知っていたのにもかかわらず、殺人を未然に防ぐことはできなかった。もちろん探偵小説の読者にとってはそうでなければ話が始まらないのだが、現実的に見ると事件の規模が小さく、事件被害者の数が少ない短編作品ならばともかく、長編作品では主人公としてあまりに情けなさ過ぎる。そこでそれ以降の金

田一シリーズの作品では、由利先生の場合よりも少し早めの主人公の登場という形に収まったと考えられる。

また、金田一の個性的な性格・外見にも由利先生の間接的な（反作用としての）影響を見出せる。由利先生は紳士的で落ち着いており、真面目で緻密な推理をするという、正統派の探偵である。この由利先生と対極の位置に金田一を作り上げることが横溝の狙いであったと考えられる。新しいキャラクターを考える時は、当然既に存在するキャラクターと重ならないようにする。それが同じジャンルにおける過去作品の主要キャラクターであればなおさらである。由利先生という既存の探偵があったからこそ、横溝は金田一耕助という新しい人物像を造型することが出来たのである（注6）。

さらに作者が『本陣殺人事件』や『獄門島』の構想を練っていた時期は戦時中であり、検閲の厳しさから探偵小説の執筆がままならなかった。そのような時に岡山県に疎開して今までに無い地方の風土に触れ、新しい世界観を取り入れた探偵小説への創作意欲に燃えていたのである。実際に横溝は岡山県や瀬戸内海を舞台とした本格探偵小説を書きたいということが理由で疎開を決意したと後に語っている（注7）。このような状況で、横溝の中で抑圧感と冒険心が通常以上に育っていても何ら不思議は無いだろう。

さらに、金田一の人生や人物造型には幼い頃から親しんでいた海外の名探偵にも影響を受けている。特にシャーロック＝ホームズの影響が色濃く見られる。初期のホームズが薬物中毒者であることや、「ぼくの特殊な能力をじっさいに発揮できるというたのしみそのものが、ぼくにとってはこのうえない報酬なんだ」（注8）という「趣味的探偵」であるところなどは金田一耕助と共通する。探偵業を趣味的に営んでいる点では由利先生に既に組み込まれているが、横溝の長年憧れていた名探偵の面影が自身のキャラクターに反映されたのだろう。

また、この横溝の岡山県への疎開は金田一がこのような独特な性格になった、直接的な要因の一つとも考えられる。神戸での都市暮らししか知らずに育った横溝が、突然地方の小さな村で生活するようになって、毎日が新鮮な驚きでいっぱいであったことだろう。既に指摘されていることだが、この岡田村での生活から得た着想は金田一シリーズ成功の大きな要因であろう。閉鎖的な地方の村、そこで昔から受け継がれてきた古い因習や迷信、村の大家での一族争いなどという、昭和四十年代半ばに当時の日本から消えつつあったモチーフを妖美なタッチで描く独特の世界が当時の読者を惹きつけたのである。しかし、この濃厚な雰囲気に陰惨な殺人事件を投入すると、小説全体の空気が重くなりすぎてしまう。仮にここに由利先生が探偵役として登場したとすると、人間の本性のおぞましさに目を覆うような悲劇は、一片の救いも無いまま幕を閉じることになるだろう。探偵が由利先生では真面目で真剣すぎて、読者は事件の悲劇性を直接的に受け止めてしまうのである。金田一のあっけらかんとした発言やどこか人の肩の力を抜けさせるような雰囲気があってこそ、『八つ墓村』（『新青年』一九四九年三月～五〇年三月、『宝石』一九五〇年十一月～五一年一月）

や『悪魔の手毬唄』（『宝石』一九五八年七月～五九年一月）のように陰惨な事件を描き切れると考えられる。服装に関しても、『八つ墓村』や『犬神家の一族』の舞台には紳士的な洋装の由利先生よりもよれよれ姿の和服の金田一の方が調和するのである（注9）。

おわりに

金田一耕助の最大の特徴はその個性的な外見及び一風変わった癖である。これらは極めて印象深いものであり、読者はこの特徴的な姿を強く脳裏に焼きつける。それは金田一の魅力であると同時に金田一の存在を示す大きな目印でもあり、「金田一耕助」の名前とこれらの描写があることで、読者は作品全体を金田一物と認識することになる。横溝ミステリーの骨子は既に由利先生物で完成されており、そこに岡山県への疎開経験から得た、地方寒村のおどろおどろしく、毒々しい世界観が加わった。それらに由利先生とは違う要素を持たせられた主人公金田一像が調和することによって、金田一シリーズが成立し、横溝ミステリーは更なる発展を遂げたと言える。

すなわち、金田一の印象的な外見や癖の描写を織り込むことによって、金田一耕助像を由利先生シリーズに代入すると、いくつかの由利先生物は『夜光怪人』のように、金田一物として生まれ変わる可能性を十分持っているのである。

注

1　由利先生シリーズとは一九三六年（『石膏美人』）から一九五〇年（『カルメンの死』まで執筆された横溝正史の現代ミステリーシリーズのことである（由利先生が登場する作品に限定）。由利先生の登場作品は中絶作品も含めて三十三作。『蝶々殺人事件』（一九四六年）からは金田一シリーズと同時進行で執筆された。

2　ソノラマ文庫（朝日ソノラマ）にて『夜光怪人』として一九七六年に発刊。著者・横溝正史、編集構成・山村正夫と記載されている。翌年、角川文庫でも出版。

3　『夜光怪人』（横溝正史著　一九五〇年刊　偕成社）一四頁。以下引用は本書による。

4　『夜光怪人』（横溝正史著　初版　一九七七年刊　角川書店）一二頁。著者は「横溝正史」とされており、山村正夫は「あとがき」を執筆しているが、編者としては名を記されていない。以下引用は本書による。

5　一九七六年公開「犬神家の一族」から二〇〇六年の同作リメイクまで監督・市川崑、金田一耕助役・石坂浩二で制作された映画シリーズ。「悪魔の手毬唄」（一九七七年公開）「獄門島」（同年公開）「病院坂の首縊りの家」（一九七九年公開）がある。

6　由利先生物は金田一ブームによって横溝正史の名が全国的に知られた現在もいまだ知名度が低く、シリーズ作品には絶版状態のものも多くある。由利先生物は金田一耕助物の母体としてもっと評価されるべきである。

7　『横溝正史自伝的随筆集』（横溝正史著　二〇〇二年刊　角川書店）収録　エッセイ「わが小説―「獄門島」」より

8　『四つの署名』一八九〇年刊（シャーロック＝ホームズ全集2　コナン＝ドイル著　一九八三年刊　偕成社）一〇頁

9　私見によれば、戦争によって探偵小説を思うままに書けなかった期間中に、横溝の中ではまず「閉ざされた村」「言い伝え」「一族」「老婆」などのモチーフが先に出来上がり、金田一の人物像はそこに後から当てはめたものだったのであろう。そしてそれらが融合して形となった作品が『本陣殺人事件』であると思われる。

（きむら　ゆか／二〇〇八年度ノートルダム清心女子大学卒業）